

山あげ祭のイメージと心理的機能

——当番町、時代、祭への関与に着目して

福島 明子*

概 要

本研究では、栃木県那須烏山市烏山地区の山あげ祭を対象として、当番町、時代、および祭への関与に着目しながら、山あげ祭のイメージや心理的機能について検討を行った。SD法により、金井町は派手で賑やかなイメージ、仲町は静かでこじんまりとしたイメージ、鍛冶町は豪華でありながら伝統を重んじる質実剛健なイメージなど、各当番町の個性が浮き彫りにされた。各当番町が個性を固持することは、自町のアイデンティティや誇り、他町への競争意識を高め、6年に一度当番町を務めあげるにあたっての原動力、烏山全体として山あげ祭を継承するモチベーションとなっていると考えられる。因子分析により、山あげ祭の心理的機能として「集団における自己実現」「自由」「神聖さ」「自尊心」「協同」の5因子が抽出された。男性、自営業者、宮座に入っている人、若衆経験者はより集団における自己実現欲求を、宮座に入っている人はより神聖さや自尊心を、高齢者はより自尊心や協同欲求を充足させていた。量的データによる検討で、従来人々が各当番町、現在および昔の若衆に対して漠然と抱いてきた特質が確認されると同時に、何百年間もの間、変遷を遂げつつ継承されてきた伝統的祭のなかに今なお固有の祭の精神が受け継がれていることが示唆された。

問題と目的

山あげ祭は、栃木県那須烏山市烏山地区（旧・那須郡烏山町）において毎年7月下旬の3日間行われる祭である。山あげ祭では付祭として劇（野外歌舞伎）が上演される。祭名の由来である山とは劇の舞台の背景のことで、毎年当番町の人たちの手で制作される。竹の骨組みに烏山特産の和紙を貼り付け、劇の物語に合わせ山や木、滝などの風景画が描かれ、滝が流れるなどの仕掛けも施してある。前山、中山、大山とよばれる小中大3つの山が、舞台後方に館や橋、波などとともに並べられる。最も大きい大山は高さ10メートルに及び、舞台に野外劇ならではの奥行きとダイナミックさを添える（図1）。

*作新学院大学人間文化学部 准教授

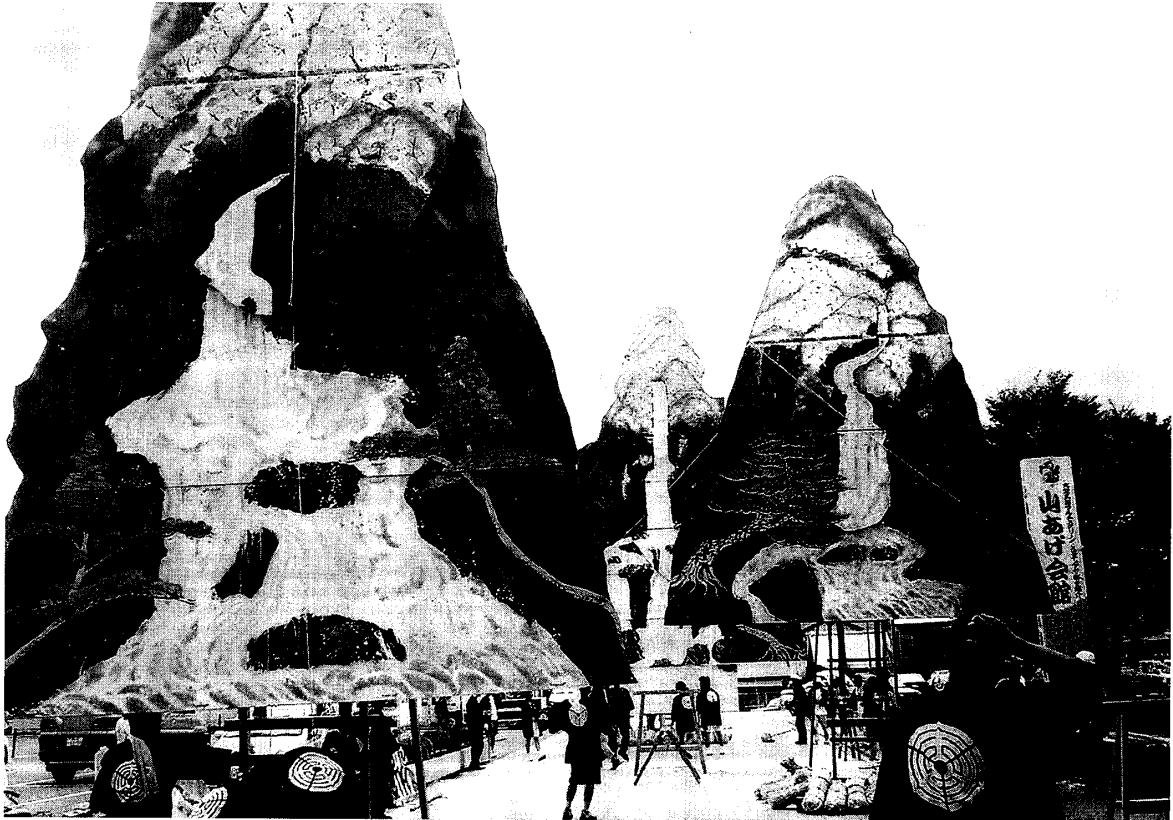


図1 舞台の後方百メートルの間に、館、橋、波などともに配置される前山、中山、大山。これらの山は毎年、当番町の人たちの手で制作される。仕掛けが施してあり、景色が早変わりするのも観客の楽しみのひとつである。

山あげ祭の特徴として当番制と町内廻りをあげることができよう。山あげ祭は、六町とよばれる旧来の6地域（泉町、鍛冶町、金井町、仲町、日野町、元田町）が毎年持ち回りで当番を受け持つ。六町は幕末まで烏山城下の町人町であった。地名変更がなされ行政上は存在しない名称であるが、現在も通称として使用され続け、自治会組織や祭においてそのまとまりが存続している（渡辺、1999）。劇は当番町においてだけでなく、他町の「御庭を拝借」して町内廻りしながらくり返し上演される。宮座のひとつ、若衆座^{わかしゅう}の若衆たちが、上演場所へと屋台、舞台、大小道具一式を運ぶ。山は組み立て式になっており、上演のたびに若衆たちが団体行動でパーツを組み立て、あげ、上演後は解体して次の上演場所へ運ぶ（図2、図3）。

宮座は各当番町にあり、御神輿、山、法被など祭に使用する道具や衣裳も各当番町の自前である。筆者が実施したインタビューや参与観察によると、各町ごとにしきたりが異なっており、宮座の人たちは他町の祭のやり方、たとえば若衆の仕事ぶりに敏感で、時に評価めいた会話をしたりする。山あげ祭に限らず、祭においては町同士、地区同士の競争が見受けられることはめずらしくない。福島（2000）は、各集落ごとに行われる高千穂夜神楽という祭を事例として、各集落の宮座（神楽保存会）について内集団の特性（成員構成、凝集性、雰囲気等）、集落の状況、外集団への意識などの比較検討を行い、各集落の神楽



図2 舞台づくりを担うのは当番町の若衆たち。高さ10メートルを超える大山も、木頭によって鳴らされる拍子木の音を合図に若衆たちが団体行動で組み立て、あげていく。



図3 劇が終わると山は解体され、地車に載せられ、屋台や他の舞台道具とともに次の上演場所へと運ばれる。山をあげ、解体し、運ぶという一連の作業に百名以上の若衆を要する。

保存会の特質を明らかにした。そのうえで、各神楽保存会がもつ内集団びいき、外集団への競争意識が、高千穂町全体として夜神楽を継承していく原動力のひとつとなっているのではないかとしている。渡辺（1999）は、山あげ祭における当番町同士の競合関係は未解明であり、その差異や個性を明らかにすることは烏山の町形成、発展の経緯を知る手がかりになると指摘する。

もうひとつ山あげ祭の調査を行うなかで印象的だったのは、昔の山あげ祭と現在の山あげ祭に対して住民が抱くイメージの違いであった。そこで当番町住民を対象に現在、過去、および将来の山あげ祭について、自由記述式の質問紙調査を実施した（福島、2008）。回答には、かつては威勢のよい若衆たちが町内を地車を引いて動き回り、今よりも大きな山をあげ、荒々しく御神輿をもんでいた様子が描写されていた。また信仰の表現として、あるいは娯楽の少ない時代にあって六町のみならず周辺地域にとっても年に一度の楽しみであったなどの回答が寄せられた。そして六町の祭であった天王祭が烏山町の「山あげの行事」として昭和54年（1979年）に国の重要無形民俗文化財の指定を受けたのを機に、宗教行事でありながら観光資源となったこと、車社会において路上で祭を行うこと、高齢者の独居世帯が増えるなかでの祭典費捻出、少子化・若者の流出と若衆の育成といったさまざまなジレンマを抱えるに至ったことも明らかにされた。しかし同時に、今なお祭の主体は各当番町にあり、とりわけ若衆が重要な役割を占める点も確かめられた。

以上のように、山あげ祭の特徴である当番町について論じるにあたって、あるいは各当番町が独自に祭の運営を行い、しきたりを有していることや、六町が互いに意識し合う関係であることを考慮に入れると、各当番町の祭の特徴をとらえることは意義あることといえよう。また昔も今も祭の主要な担い手である若衆に対して人々が抱いている漠然としたイメージを当番町および時代ごとに実証的に検証することは、祭りの変遷の一端をとらえる機会となると考えられる。そこで本研究では、当番町、時代、および祭への自我関与（若衆経験有無など）に着目しながら、山あげ祭のイメージや心理的機能について比較検討を行った。

方 法

1 調査地域

調査を行った栃木県旧那須郡烏山町は、2005年10月に旧那須郡南那須町と合併し那須烏山市烏山地区と地名変更された。しかしながら本調査は合併以前に実施されたことから、調査時点での旧名で記す。調査対象は、烏山町の中心部に位置する六町（鍛冶町、日野町、元田町、金井町、仲町、泉町）、および屋敷町である。この七町についても中央一丁目など地名変更がなされているが、前述のとおり現在も通称として使用され、自治会組織や祭

においてまとまりが維持されていることから旧名で記すこととする。なお屋敷町は当番町ではないが、六町に隣接する地域であることから当番町との比較検討のため調査の対象とした。

2 調査年月

2004年4～7月、インタビュー、および祭準備・祭当日の参与観察実施。

2004年11～12月、質問紙調査実施。

3 調査方法と手続き

(1)インタビュー、参与観察

宮座に所属する若衆経験者、八雲委員、踊り手の師匠に対してインタビューを実施した。また山あげ祭の準備および当日の参与観察を行った。

(2)質問紙調査

(1)で収集した質的データをもとに調査項目を作成し、旧七町において質問紙調査を実施した。各町の世帯比率に応じて各町のサンプル数を算出し、調査対象世帯は住宅地図上でランダムに選出した。各世帯に直接、調査票と依頼状を配布し、依頼状に明記した回収日(2週間後)に回収を行った(留置法)。配布数737、回収数283。回収した調査票のうちほぼ白紙のものは無効票として分析から除外したため有効回答数は268であった(有効回答率36.4%)。回答者の内訳は以下のとおりである。

- ・居住地：泉町16名、鍛冶町18名、金井町74名、仲町17名、日野町74名、元田町30名、屋敷町21名、その他8名、不明10名。
- ・性別：男性79名、女性174名、不明15名。
- ・年代：10歳代7名、20歳代10名、30歳代16名、40歳代39名、50歳代51名、60歳代58名、70歳代60名、80歳代9名、90歳代1名。不明17名。
- ・若衆経験：あり103名、なし148名、不明17名。
- ・出身：烏山町189名、烏山町以外55名、不明24名。

4 調査内容

(1)祭に対する意識

山あげ祭に対する意識を問う12項目を使用した(福島、2008)。下位尺度は「賑わい・交流の促進」(5項目)、「旧六町の祭」(3項目)、「威勢のよい祭」(2項目)、「見どころは劇とブンヌキ」(2項目)の4つで、6段階評定で回答を求めた。

(2)祭のイメージ

①祭の雰囲気：SD法を用いて自分の町の祭の雰囲気について回答を求めた。質問項目は

「元気な—おとなしい」「豪華な—地味な」「緻密な—大ざっぱな」など16項目であった。

②若衆のイメージ：SD法を用いて自分の町の現在および昔の若衆のイメージについて回答を求めた。質問項目は「きびきびした—だらだらした」「団結した—まとまりのない」「礼儀正しい—傍若無人な」など20項目であった。①②とも6段階評定で回答を求めた。

(3)祭の心理的機能

山あげ祭によって個人の欲求をどの程度満たしているか質問した。質問項目はTinsley et al. (1977) が作成したParagraphs About Leisure (PAL) を参考に作成した。PALは余暇活動によりどのような欲求充足がなされるかを調べるために考案された自己評定尺度で、Murray (1938) などによって提唱された広範囲の欲求を網羅している。自己実現、友愛、パワーなどの下位尺度が設けられているが、PALを用いてFukushima (2000) が伝統的祭を対象に行った研究では余暇活動とは異なる因子が抽出された。そこで本研究においてもPALを構成する項目を用いて探索的因子分析を行った。質問項目は50項目で、「山あげ祭では」の文章に続けて以下のような各欲求を表す文章を続けた。能力活用：「自分の能力を発揮する」、達成：「困難なことをやり遂げる」など。回答は6段階評定とした。

結 果

1. 祭に対する意識

表1は、山あげ祭に対する意識の各下位尺度の得点（構成項目の平均値）を当番町ごとに算出した結果である。屋敷町を含めた七町で分散分析を行ったところ、因子Ⅳで有意差がみとめられた ($F(5, 204) = 3.32, p < .01$)。フィッシャー法による多重比較の結果、仲町は、元田町を除き、山あげ祭の見どころは劇やブンヌキであるという意識が最も低かった。また日野町と金井町は、仲町や元田町よりも見どころは劇とブンヌキという意識が強かった。

2 祭の雰囲気

自分の町の祭の雰囲気を問う16項目について、当番町を要因とする分散分析を行ったところ、「元気な」「品がある」「大きい」「地味な」「感情的な」「豪華な」「六町のなかで一目おかれた」の7項目で有意であった（順に $F(5, 212) = 5.76, p < .01$; $F(5, 212) = 4.92, p < .01$; $F(5, 212) = 7.71, p < .01$; $F(5, 211) = 2.95, p < .05$; $F(5, 211) = 2.82, p < .05$; $F(5, 211) = 2.31, p < .05$; $F(5, 212) = 2.83, p < .05$)。また「個性的な」「力強い」「緻密な」の3項目で有意傾向にあった ($F(5, 211) = 2.17$; $F(5, 211) = 2.17$; $F(5, 211) = 2.05$, 各 $p < .10$)。

フィッシャー法による多重比較の結果、最もおとなしいイメージは仲町、最も上品なイメージは鍛冶町と仲町、最も個性的なイメージは鍛冶町、最も大きなイメージは鍛冶町と

表1 各当番町の山あげ祭に対する意識

因子	町	n	M	SD	F
第Ⅰ因子：賑わい・交流の促進	全 体	231	4.08	1.04	1.20
	泉 町	12	3.93	.98	
	鍛冶町	16	4.18	.89	
	金井町	67	3.93	1.04	
	仲 町	16	3.80	1.08	
	日野町	71	4.18	1.01	
	元田町	28	4.07	1.30	
	屋敷町	21	4.50	.75	
第Ⅱ因子：旧六町の祭	全 体	231	5.31	.79	.97
	泉 町	12	5.25	.85	
	鍛冶町	16	5.60	.39	
	金井町	67	5.18	.92	
	仲 町	16	5.29	.88	
	日野町	71	5.35	.68	
	元田町	28	5.21	.99	
	屋敷町	21	5.49	.50	
第Ⅲ因子：威勢のよい祭	全 体	231	3.41	1.19	1.15
	泉 町	12	3.13	.88	
	鍛冶町	16	3.50	1.11	
	金井町	67	3.30	1.28	
	仲 町	16	3.41	1.14	
	日野町	71	3.28	1.08	
	元田町	28	3.75	1.36	
	屋敷町	21	3.81	1.22	
第Ⅳ因子：見どころは劇やブンヌキ	全 体	231	3.68	1.09	2.82 *
	泉 町	12	3.63	.64	
	鍛冶町	16	3.59	1.31	
	金井町	67	3.72	1.10	
	仲 町	16	2.94	1.21	
	日野町	71	3.98	1.01	
	元田町	28	3.32	1.07	
	屋敷町	21	3.71	.97	

※ * $p<.05$

金井町であった。派手さでは金井町、冷静さでは仲町と鍛冶町がトップであった。最も豪華なイメージは鍛冶町と金井町であった。弱々しさでは仲町、緻密さでは鍛冶町と仲町がトップであった。六町のなかで一目おかれていると思われていたのは鍛冶町と金井町であった。

図4は、各当番町の祭のイメージを図示したものである。各当番町の特徴を把握しやすいように、対照的なイメージの金井町と仲町、泉町と鍛冶町、似通ったイメージの日野町と元田町をそれぞれ一つの図に表した。

金井町は、より元気、大きい、派手で豪華、六町の中で一目おかれたイメージであった。対照的に仲町は、よりおとなしくて弱々しく、品があり、冷静・緻密なイメージであった。鍛冶町も金井町と同様、六町のなかで一目おかれていると思われており、元気さ、大きさ、豪華さの面では金井町と共通していたが、金井町とは異なり、品がよく、個性的、冷静・緻密というイメージも強かった。対照的に泉町は、より質素でこじんまりしたイメージであった。元田町は他町と比べ、よりこじんまりとしながらも感情的なイメージをもたれていた。元田町と日野町は、「元気な－おとなしい」「力強い－弱々しい」「緻密な－大ざっ

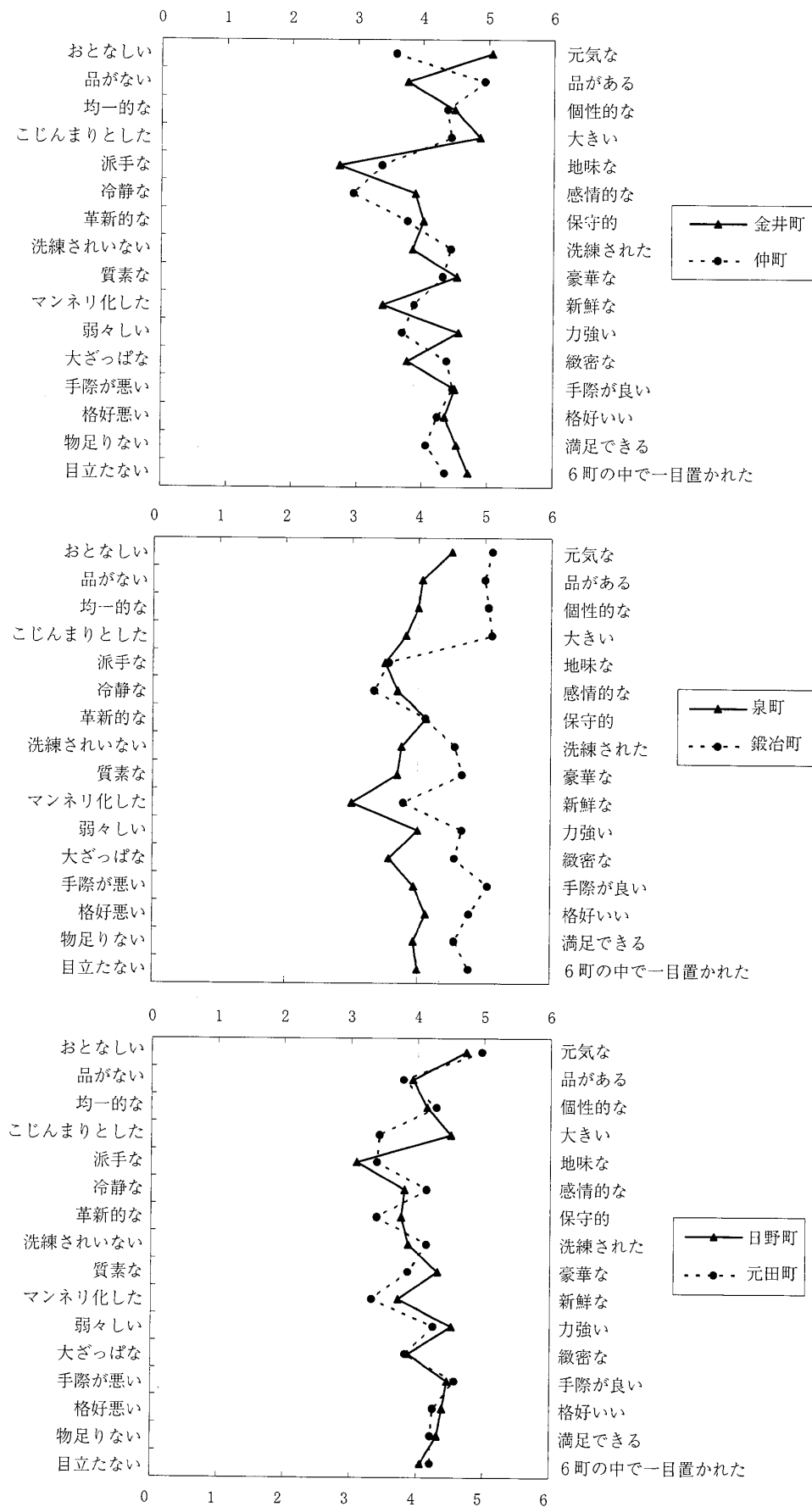


図4 各当番町の祭のイメージ

ばな」「手際が良いー手際が悪い」「満足したー物足りない」「六町のなかで一目おかれたー目立たない」の項目で似通っていた。

3 若衆のイメージ

(1)現在の若衆と昔の若衆

若衆に対するイメージを問う20項目を用いて主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。第Ⅲ因子で固有値が1を切り累積寄与率が60%を超えたため、因子の数を2とした(表2)。第Ⅰ因子は「手際がいい」「一生懸命な」「団結した」「誇り高い」「礼儀正しい」「責任感が強い」などから成り、「統率感」と解釈された。第Ⅱ因子は「目立ちたがりの」「怖い」から成り、「荒々しさ」と名づけた。

表2 若衆に対するイメージ・因子分析結果

項目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	共通性
第Ⅰ因子：統率感 ($\alpha=.95$)			
手際がいい	.897	.186	.839
一生懸命な	.877	.104	.781
団結した	.870	.163	.783
誇り高い	.840	.203	.748
礼儀正しい	.806	.058	.654
責任感が強い	.802	.295	.730
格好いい	.771	.261	.663
おおらかな	.735	.150	.562
憧れの存在である	.681	.220	.513
第Ⅱ因子：荒々しさ ($\alpha=.65$)			
目立ちたがりの	.258	.733	.604
怖い	.057	.629	.399
固有値	5.999	1.275	
寄与率 (%)	54.5	11.6	
累積寄与率 (%)	54.5	66.1	
クロンバック $\alpha=.93$			

※ゴシックは因子負荷量.600以上。

※2つ以上の項目に高い因子負荷量をもつ9項目は削除した。

表3は、各当番町、各時代(現在、昭和50年代以前)ごとに因子得点(構成項目の平均値)を算出したものである。当番町、および時代を要因とする2要因分散分析を行ったところ、第Ⅰ因子、第Ⅱ因子ともに時代で有意であった($F(1, 139)=31.86$; $F(1, 136)=20.37$, 各 $p<.01$)。昔の若衆は現在の若衆よりも有意に統率感があり、荒々しいイメージであった。

(2)現在の各当番町の若衆

現在の若衆について20項目それぞれについて平均値を算出し、当番町を要因とする分散分析を行った。その結果、「迫力がある」「たくましい」「声大きい」「にぎやかな」「競争意識が強い」「目立ちたがりの」「情熱的な」の7項目で有意であった(順に $F(5, 213)=4.83$; $F(5, 211)=3.81$; $F(5, 212)=5.28$; $F(5, 213)=3.66$; $F(5, 213)=3.95$; $F(5, 210)=3.77$; $F(5, 210)=3.67$, 各 $p<.01$)。また「礼儀正しい」については有意傾向にあった(F

表3 各当番町、各時代の若衆に対するイメージ

因子	当番町・時代	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i>
第Ⅰ因子：統率感	全体	290	4.56	1.03	
	泉 町	26	4.22	.97	1.49
	鍛冶町	24	5.08	.58	
	金井町	90	4.56	1.03	
	仲 町	26	4.43	1.04	
	日野町	88	4.60	1.13	
	元田町	36	4.45	.98	
	現在	145	4.31	1.06	31.86 **
	昔※1	145	4.81	.94	
	泉 町 現在	13	3.97	.88	.31
	昔	13	4.47	1.01	
	鍛冶町 現在	12	4.95	.53	
	昔	12	5.21	.63	
	金井町 現在	45	4.30	1.06	
	昔	45	4.82	.95	
	仲 町 現在	13	4.13	1.02	
	昔	13	4.73	1.01	
	日野町 現在	44	4.37	1.20	
	昔	44	4.83	1.03	
	元田町 現在	18	4.09	1.04	
	昔	18	4.81	.79	
第Ⅱ因子：荒々しさ	全体	284	3.59	1.04	
	泉 町	26	3.58	.77	1.69
	鍛冶町	24	3.17	1.21	
	金井町	102	3.67	1.08	
	仲 町	28	3.25	.65	
	日野町	80	3.77	1.06	
	元田町	24	3.46	1.15	
	現在	142	3.36	.93	20.37 **
	昔	142	3.82	1.10	
	泉 町 現在	13	3.46	.48	.72
	昔	13	3.69	.99	
	鍛冶町 現在	12	2.83	.98	
	昔	12	3.50	1.37	
	金井町 現在	51	3.36	.96	
	昔	51	3.97	1.12	
	仲 町 現在	14	3.21	.73	
	昔	14	3.29	.58	
	日野町 現在	40	3.59	.98	
	昔	40	3.95	1.12	
	元田町 現在	12	3.13	1.05	
	昔	12	3.79	1.20	

※1 昭和50年代以前。

※2 現在、昔の両方について回答した被調査者のデータを使用。現在のみにして回答したデータは分析から除外した。

※3 ** $p<.01$

(5, 212)=1.93, $p<.10$)。

フィッシャー法による多重比較の結果、最も迫力があると思われていたのは金井町と日野町、最も迫力がないと思われていたのは仲町であった。もっともひ弱なイメージは仲町、たくましいイメージは金井町、元田町、日野町であった。礼儀正しいイメージは鍛冶町と元田町、傍若無人なイメージは泉町と日野町であった。最も声が小さく静かなイメージは仲町、賑やかなのは元田町と金井町であった。最も競争意識が低く、控えめで、冷めたイメージは仲町であった。競争意識が高いのは金井町、目立ちたがりなのは金井町と日野町

と泉町、最も情熱的なイメージは金井町であった。

図5は、図4と同様にプロフィールが対照的な町、似ている町を一緒に図示したものである。対照的なのは金井町と仲町で、金井町の若衆は迫力がある、たくましい、賑やか、競争意識が強い、目立ちたがり、情熱的といったイメージ、対照的に仲町の若衆は迫力がなく、ひ弱で声が小さく静かで、競争意識が低く、控えめ・冷めたイメージであった。鍛冶町の若衆は目立ちたがりではないものの、きびきびと礼儀正しく、一生懸命、団結し責任感のあるイメージであった。泉町の若衆はこれらの項目において鍛冶町とは対照的であった。日野町と元田町で共通していたのは、よりたくましく、優しく賑やかといったイメージであった。

(3)現在の若衆と昔の若衆

第Ⅰ因子、第Ⅱ因子ともに現在の若衆と昔の若衆で有意差がみとめられたことから、20項目すべてについて時代を要因とする分散分析を行った。その結果、「目立ちたがりの一控えめな」を除いた全項目で有意差がみとめられた。図6からもわかるとおり、昔の若衆の方が、有意に迫力があり、格好よく、きびきびとし、憧れの存在で、たくましく、怖く、団結し、礼儀正しく、一生懸命で、声が大きく、誇り高く、手際がよく、楽しそうで、賑やかで、競争意識が強く、上下関係が厳しく、責任感が強く、情熱的で大らかであった。

4 祭の心理的機能

(1)祭の心理的機能・因子構造

山あげ祭によってどのような欲求を充足できるかを問う50項目について、2因子以上に高い因子負荷量をもつ項目を次々に削除しながら因子分析を行った（主因子法、バリマックス回転）。その結果、第Ⅴ因子で累積寄与率が60%を超えたため因子の数を5とした（表4）。

第Ⅰ因子は達成欲求、能力活用欲求、向上欲求、攻撃欲求など積極的に自己実現を図ろうとする欲求だけでなく、協調欲求、恭順欲求など他者とうまく関わろうとする欲求も含まれることから「集団における自己実現」と名づけた。第Ⅱ因子は自律欲求、独立欲求、排除欲求、遊戯欲求、性欲求から成り、独立心旺盛で、まわりの意見よりも自分自身の意志を尊重し、また異性と交流しながら楽しく過ごしたいという欲求を意味することから「自由」と解釈された。第Ⅲ因子は道徳欲求、秩序欲求、感性感求から成り、道徳的で秩序だったあらたまった雰囲気の中感性が研ぎ澄まされることから「神聖さ」と命名した。第Ⅳ因子は優越欲求、承認欲求から成り「自尊心」を意味すると考えられる。第Ⅴ因子は公平欲求、依存欲求から成り、一部にかたよることなく他を頼りとすることから「協同」と名づけた。

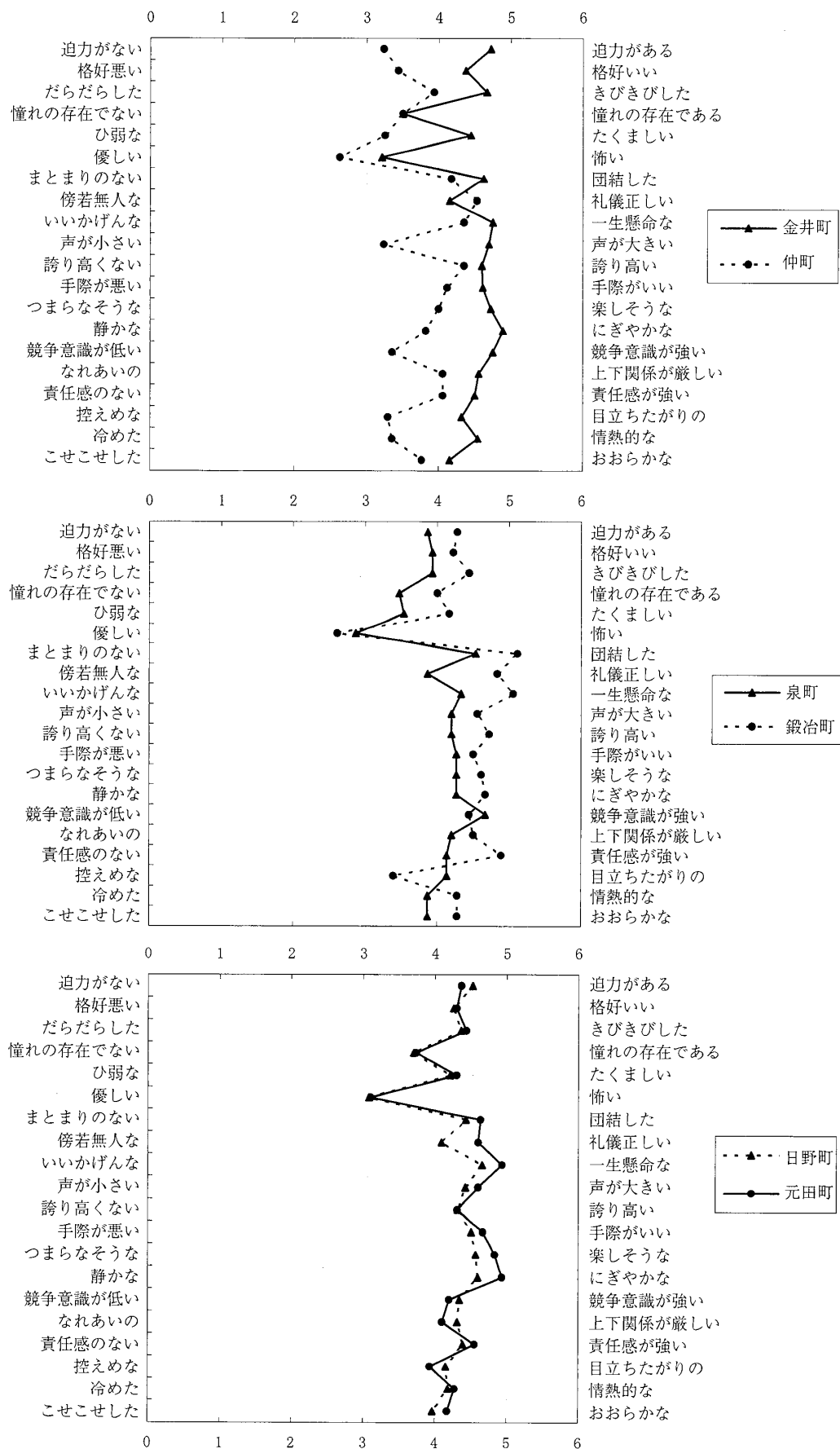


図5 各当番町の若衆のイメージ

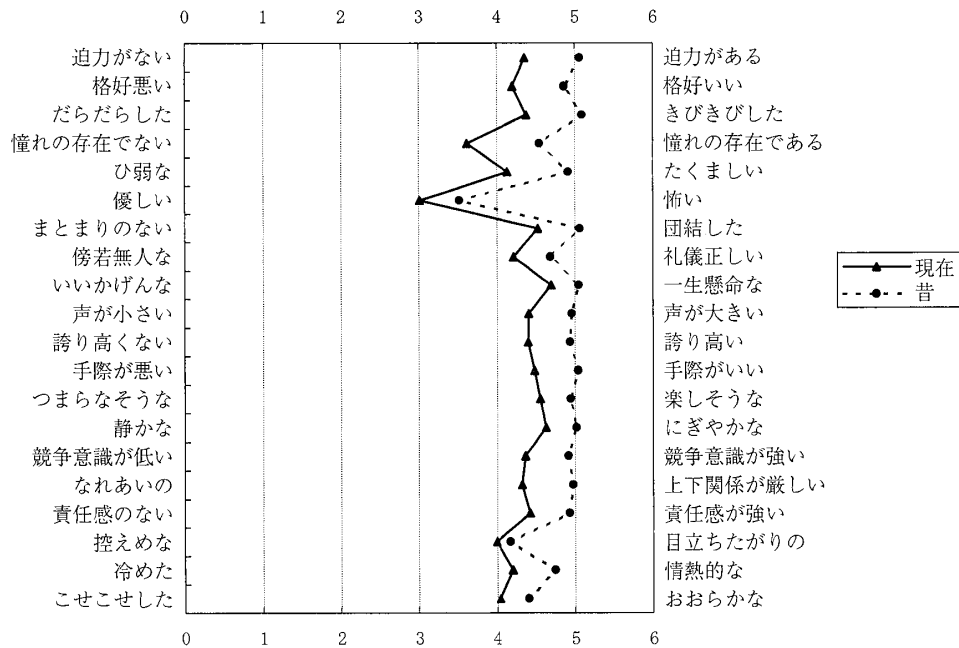


図6 現在の若衆と昔の若衆のイメージ

表4 山あげ祭の心理的機能・因子分析結果

項目	I	II	III	IV	V	共通性
第Ⅰ因子:集団における自己実現 ($\alpha=.94$)						
達成	.844	.130	.094	.143	-.182	.792
身体活動	.817	.075	.070	.067	.044	.684
能力活用	.804	.201	.179	.232	-.246	.833
向上	.783	.128	.294	.188	-.128	.768
協調	.747	-.111	.314	.205	.146	.733
権威	.736	.119	.086	.330	-.031	.673
活動	.720	.195	-.034	-.210	.169	.630
恭順	.715	-.009	.283	.286	.275	.750
従順	.662	.093	.296	.192	.326	.677
攻撃	.628	.217	.301	.282	.001	.612
第Ⅱ因子:自由 ($\alpha=.71$)						
自律	.175	.751	.061	.167	.001	.626
独立	.091	.737	-.053	-.040	.256	.621
排除	.174	.612	-.067	.458	.128	.635
遊戯	-.260	.576	.419	-.024	.034	.577
性	.349	.555	.166	.125	.030	.474
第Ⅲ因子:神聖さ ($\alpha=.77$)						
道徳	.273	.061	.808	.065	.170	.764
秩序	.376	-.008	.751	.226	.090	.764
感性	.340	.322	.549	.254	-.213	.631
第Ⅳ因子:自尊心 ($\alpha=.73$)						
優越	.317	.199	.116	.741	.020	.704
承認	.205	.104	.297	.740	.210	.733
第Ⅴ因子:協同 ($\alpha=.61$)						
公平	.093	.030	.119	.190	.806	.709
依存	-.097	.304	.017	-.016	.784	.717
固有値	6.353	2.572	2.345	2.016	1.820	
寄与率 (%)	28.9	11.7	10.7	9.2	8.3	
累積寄与率 (%)	28.9	40.6	51.2	60.4	68.7	
クロンバック $\alpha=.92$						

※ゴシックは因子負荷量.500以上。
 ※2つ以上の因子に高い負荷量をもつ項目は削除した。

(2)属性、祭への関与、当番町と心理的機能

年代・性別、若衆経験有無、当番町ごとに因子得点を算出した（表5）。性別を要因とする分散分析を行ったところ、第Ⅰ因子で有意であった（ $F(1, 221)=9.82, p<.01$ ）。男性の方が女性よりも有意に集団における自己実現欲求を満たしていた。年代（10～30歳代、40～50歳代、60歳代以上）を要因とする分散分析の結果、第Ⅳ因子、第Ⅴ因子で有意であった（ $F(2, 218)=3.53, p<.05$; $F(2, 218)=6.95, p<.01$ ）。フィッシャー法による多重比較の結果、60歳以上の方は10～30歳代よりも有意に山あげ祭によって自尊心を満たし、また60歳以上の方は最も協同欲求を満たしていた。

職業を要因とする分散分析を行った〔勤め人（会社員、公務員、団体職員）、自営業、主婦、定年引退の4水準。被調査者数の少ない職業は分析から除外）。その結果、第Ⅰ因子で有意であった（ $F(3, 206)=3.05, p<.05$ ）。フィッシャー法による多重比較の結果、自営業者は勤め人や主婦よりも有意に集団における自己実現欲求を満たしていた。出身（烏山町内、烏山町外）を要因とする分散分析を行ったところ、第Ⅰ因子で有意傾向にあった（ $F(1, 212)=3.05, p<.10$ ）。烏山町内出身者は町外出身者よりも集団における自己実現欲求を満たす傾向にあった。

祭における役割（宮座所属者、その他の役割、役割なし）を要因とする分散分析を行ったところ、第Ⅰ因子、第Ⅲ因子、第Ⅳ因子で有意であった（ $F(2, 109)=23.13$; $F(2, 109)=10.39$; $F(2, 109)=9.21$, 各 $p<.01$ ）。フィッシャー法による多重比較の結果、宮座に所属している人は、祭における役割のない人よりも有意に地域における自己実現欲求、神聖さ、自尊心を満足させていた。

宮座に所属している人は現在または過去において若衆を経験していることから、若衆経験（あり、なし）を要因とする分散分析を行った。その結果、第Ⅰ因子で有意（ $F(1, 223)=42.90, p<.01$ ）で、若衆経験のある人の方が有意に集団における自己実現欲求を満たしていた。また第Ⅲ因子で有意傾向にあり（ $F(1, 223)=3.67, p<.10$ ）、若衆経験者はそうでない人よりも祭においてより神聖さを味わう傾向にあった。当番町についてはいずれの因子においても有意差はみとめられなかった。

表5 属性、祭りへの関与、当番町を要因とする分散分析結果

因子／要因		水準	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i>	因子／要因		水準	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i>
因子Ⅰ：集団における自己実現							因子Ⅳ：自尊心						
全体			225	3.72	1.14		全体			225	3.18	1.11	
性別	男性		159	3.87	1.14	9.82**	性別	男性		159	3.19	1.10	.30
	女性		64	3.35	1.07			女性		64	3.10	1.12	
年代	10～30歳代		32	3.72	1.18	.45	年代	10～30歳代		32	2.78	1.26	3.53*
	40～50歳代		83	3.64	1.20			40～50歳代		83	3.14	.95	
	60歳代～		106	3.80	1.08			60歳代～		106	3.35	1.12	
職業	勤め人		49	3.58	1.20	3.05*	職業	勤め人		49	3.03	.99	1.06
	自営業		83	3.99	1.08			自営業		83	3.28	1.07	
	主婦		26	3.29	1.10			主婦		26	2.94	1.18	
	定年引退		52	3.72	1.06			定年引退		52	3.27	1.16	
出身	烏山町内		168	3.79	1.17	3.05†	出身	烏山町内		168	3.21	1.10	.35
	烏山町外		46	3.45	1.05			烏山町外		46	3.10	1.08	
祭における役割	宮座所属		52	4.41	.92	23.13**	祭における役割	宮座所属		52	3.44	1.11	9.21**
	その他		33	4.10	.90			その他		33	3.33	.97	
	役割なし		27	2.82	1.23			役割なし		27	2.39	1.12	
若衆経験	あり		98	4.24	.95	42.90**	若衆経験	あり		98	3.32	1.12	2.61
	なし		127	3.31	1.11			なし		127	3.07	1.10	
当番町	泉町		14	3.94	.95	1.75	当番町	泉町		14	3.54	.99	1.37
	鍛冶町		18	3.90	1.19			鍛冶町		18	2.89	1.12	
	金井町		63	3.51	1.15			金井町		63	3.24	1.07	
	仲町		15	4.02	1.02			仲町		15	2.70	.96	
	日野町		66	3.64	1.08			日野町		66	3.30	1.12	
	元田町		29	4.12	1.03			元田町		29	3.09	1.19	
	因子Ⅱ：自由							因子Ⅴ：協同					
全体			225	2.38	.71		全体			225	2.87	1.03	
性別	男性		159	2.42	.68	.97	性別	男性		159	2.86	.99	.41
	女性		64	2.32	.78			女性		64	2.95	1.14	
年代	10～30歳代		32	2.28	.69	.57	年代	10～30歳代		32	2.61	1.01	6.95**
	40～50歳代		83	2.43	.70			40～50歳代		83	2.66	.94	
	60歳代～		106	2.42	.72			60歳代～		106	3.15	1.04	
職業	勤め人		49	2.41	.63	1.29	職業	勤め人		53	2.84	1.00	.68
	自営業		83	2.41	.73			自営業		83	2.78	.99	
	主婦		26	2.12	.79			主婦		26	2.85	1.25	
	定年引退		52	2.38	.70			定年引退		52	3.04	1.01	
出身	烏山町内		168	2.41	.70	1.40	出身	烏山町内		168	2.83	1.01	.96
	烏山町外		46	2.27	.75			烏山町外		46	3.00	1.14	
祭における役割	宮座所属		52	2.40	.66	1.95	祭における役割	宮座所属		52	2.71	1.02	.18
	その他		33	2.28	.65			その他		33	2.74	.90	
	役割なし		27	2.07	.80			役割なし		27	2.59	1.11	
若衆経験	あり		98	2.42	.66	.40	若衆経験	あり		98	2.76	1.01	2.12
	なし		127	2.36	.75			なし		127	2.96	1.04	
当番町	泉町		14	2.30	.78	.35	当番町	泉町		14	2.79	1.20	.84
	鍛冶町		18	2.42	.78			鍛冶町		18	2.97	.90	
	金井町		63	2.41	.72			金井町		63	2.98	1.14	
	仲町		15	2.24	.53			仲町		15	2.63	.95	
	日野町		66	2.45	.79			日野町		66	3.03	1.00	
	元田町		29	2.32	.56			元田町		29	2.66	.94	
	因子Ⅲ：神聖さ												
全体			225	3.70	1.01								
性別	男性		159	3.73	1.02	.13							
	女性		64	3.67	.96								
年代	10～30歳代		32	3.78	1.06	1.75							
	40～50歳代		83	3.56	.99								
	60歳代～		106	3.83	.96								
職業	勤め人		49	3.68	1.03	.24							
	自営業		83	3.70	1.04								
	主婦		26	3.58	1.01								
	定年引退		52	3.78	.98								
出身	烏山町内		168	3.75	.95	2.64							
	烏山町外		46	3.48	1.15								
祭における役割	宮座所属		52	4.04	.96	10.39**							
	その他		33	3.96	.82								
	役割なし		27	3.05	1.10								
若衆経験	あり		98	3.84	.96	3.67†							
	なし		127	3.59	1.03								
当番町	泉町		14	3.58	.98	.35							
	鍛冶町		18	3.98	.99								
	金井町		63	3.70	.94								
	仲町		15	3.67	.86								
	日野町		66	3.78	1.02								
	元田町		29	3.76	1.02								

※ ***p*<.01 **p*<.05 †*p*<.10

考 察

各当番町により、山あげ祭に対する意識、祭や若衆に対するイメージに違いがあることが確かめられた。最も対照的であったのは金井町と仲町であった。金井町の住民は自町の祭に対し派手で賑やかで目立つイメージ、仲町の住民は静かでこじんまりとしたイメージを抱いていた。どうして対照的な結果となったのであろうか。

福島（2008）は自由記述の質問紙調査をもとに、山あげ祭に関して住民の最大の関心事は経費、担い手、当番町制の3つであることを明らかにしたが、根底に少子高齢化、世帯数減少があるという意味でこの3つは不可分である。とりわけ深刻なのは仲町であった。調査時点において、金井町では世帯数が千戸を超えていたのに対し、仲町は約65戸と前者の20分の1ほどしかなかった。そのため仲町では一戸あたりの祭費用が高額であり、また高校生のアルバイトを雇うなどして若衆を確保しているが、「高校生のアルバイトではひ弱」という意見も寄せられた（福島、2008）。町の規模からくる若衆の人数、祭費用の差が、祭や若衆の雰囲気ダイレクトに反映されているものと考えられる。なお、金井町では山あげ祭の見どころは劇とブンヌキであるという意識が強く、仲町では低かった。ブンヌキでは六町の屋台が一堂に会し、太鼓のばち捌きを競い合う。六町がそれぞれの屋台において太鼓と笛の音を鳴り響かせるなか、まわりを各町の若衆たちが取り囲んで氣勢を上げ自町の太鼓を盛り上げるため、一種恍惚状態に似た熱気に包まれる。（図7）。劇の舞台も山あげも、そしてブンヌキでも、若衆が多ければ多いほど迫力が増し、十分な費用をかければかけるほど豪華さが増すと考えられる。町の規模の大きい金井町で見どころは劇とブンヌキという意識が強いのはそのためではないだろうか。

一方で、仲町の祭は緻密で上品で洗練されたイメージであった。自由記述式の質問紙調査においても、「仲町はプロの踊り手やプロの照明を使い斬新な山あげを行っている。これは観光客にも喜ばれている。その他いろいろな改革等を行っている」（40歳代男性、自営業）といった感想が寄せられた（福島、2008）。町の規模のみならず、独自のアイデア・工夫を凝らすことが仲町らしい雰囲気を形成していると考えられる。

鍛冶町も金井町と同様、六町のなかで一目おかれ、大きく豪華なイメージであったが、金井町とは違って上品で冷静・緻密なイメージも持ち合わせていた。両者の違いは若衆のイメージにおいても顕著で、鍛冶町の若衆は礼儀正しくきびきびしてまとまりのあるイメージであった。また山あげ祭の見どころは劇やブンヌキであるという意識は低かった。つまり鍛冶町は、豪華でありながら、伝統を重んじる質実剛健なイメージを醸し出しているといえる。

その他、泉町の若衆は、質素でこじんまりした祭のイメージ、目立ちたがりで傍若無人



図7 六町の屋台が一堂に会して太鼓のばち捌きを競うブンヌキ。各町の屋台のまわりには若衆たちが陣取り、氣勢を上げる。

[図1～3、図7は2004年度山あげ祭にて筆者撮影。当番町：金井町]

なイメージをもたれていた。元田町と日野町は概して似通った平均的イメージであったが、日野町は大きい、元田町はこじんまりしたという点对照的であった。若衆はきびきびとしてたくましく、それでいて優しいイメージであった。全体的にみて、金井町、日野町、元田町の若衆は、鍛冶町や仲町よりも荒々しいイメージであった。

以上の結果は、筆者がインタビューや参与観察で得た「鍛冶町は伝統を守っている」「金井町は人数も多いし屋台も大きいし、何でも大きい」といった質的データと符合するものであった。量的データを用いた分析により、住民が漠然と抱いている祭りの雰囲気、若衆のイメージが浮き彫りにされたといえよう。

「問題と目的」で述べたように、自由記述式の質問紙調査によると、かつて山あげ祭は信仰を表現する機会として、年に一度の楽しみとして町をあげて盛大に行われ、若衆たちが町内を威勢よく動き回り、今より大きな山をあげ、荒々しく御神輿をмонでいたという(福島、2008)。本研究の結果からも、昔の若衆は今よりももっと統率感があり荒々しかったなど、より強い印象を残していることが実証的に検証された。

次に山あげ祭の心理的機能について考えてみたい。因子分析で抽出されたのは、「集団における自己実現」「自由」「神聖さ」「自尊心」「協同」の5因子であった。一方、Fukushima (2000) によると、高千穂夜神楽において充足できる欲求として「相互協力」

「パワー」「自己表現」「感覚的快楽」「自尊心」の5因子が確認されている。祭の担い手も季節も芸能形態も異なる高千穂夜神楽と比較することで山あげ祭の特徴がより明白になると考えられることから、以下、高千穂夜神楽と対比させながら本研究の分析結果について検討を加える。

高千穂夜神楽は、昭和53年（1978年）に国の重要無形民俗文化財に指定された伝統的祭である。高千穂夜神楽の舞台である宮崎県西臼杵郡高千穂町は、山間部に位置する人口約1万4千人の過疎地域で、日本神話の「天孫降臨」の地として知られる。高千穂夜神楽は豊作を祝い五穀豊穡を祈って行われるが、町をあげて年に1度行われるのではなく、町内の各集落ごとに行われる。そのため町全体でみると11月から2月かけての農閑期の間じゅう、夜神楽が続くことになる。集落ごとの祭のため、祭の運営は少ない集落では20戸ほどでなされる。夜神楽は民家や公民館を神楽宿として行われる。午後3時頃、神社に氏神さまを迎えに行き、神楽宿にお連れし、翌日の午前中まで二日一夜をかけて氏神さまに神楽を奉納する。神楽の舞い手は奉仕者殿（ホシヤドン）とよばれ、祭当番のもてなしを受けながら徹夜で太鼓を叩き、笛を吹き、神楽を舞い続ける。神楽宿では見物人にも食事や酒がふるまわれる。

以上のように、集落内の限られた人手により、寒い冬の夜に神楽宿という狭い空間で二日一夜をかけて行われることから相互協力、パワーが必要であり、加えて神楽という芸能の特質から自己表現、感覚的快楽欲求が満たされると考えられる。

対照的に山あげ祭は夏に屋外で行われるため、自由を味わえるのであろう。また3日間にわたってくり返し大がかりな野外劇を上演するにあたって大勢の人々が集団行動で舞台を支えることから協同が必要であり、また集団における自己実現がなされると考えられる。

そしてどちらの祭りにおいても自尊心が満たされていた。山あげ祭も高千穂夜神楽も国の重要無形民俗文化財である。「天孫降臨」の地・高千穂町においては、神話や神々との結びつきが強く、その象徴が夜神楽であり、高千穂町の地域アイデンティティとなっている。一方、庄司ら（1987）が仲町で実施した質問紙調査によると、最も烏山らしさを感じる要因として、自然景観や和紙などをおさえ祭りがトップを占めていた。福島（2008）が行った質問紙調査でも、年代や性別、祭への関わり方に関係なく、山あげ祭は旧六町の祭であると考えられていた。地域アイデンティティとしての祭が、個人に自尊心をもたらしていることがわかる。

祭りや若衆のイメージとは異なり、心理的機能に関しては当番町による違いはみとめられなかったが、一方で属性や祭との関わりによる顕著な違いがみとめられた。男性、宮座に所属している人、若衆経験者は、山あげ祭によってより集団における自己実現欲求を満足させていた。また宮座に入っている人は、山あげ祭でより神聖さや自尊心を味わっていた。

福島（2008）は、参与観察や質問紙調査をもとに、地元の人たちは、観光客を惹きつける劇よりもむしろ舞台を裏で支える若衆に注目しており、踊り手が表舞台の主役ならば若衆は裏舞台の主役であると表現した。また、踊り手の人数は、百名以上を要するとされる若衆に比べると少数である。このように山あげ祭への直接的な関与や人数の違いが性差を生む要因と考えられる。

伝統的祭においては祭を熟知した高齢者が重要な役割を果たす。そのため高千穂夜神楽では、高齢者がよりパワーを発揮し、自尊心を満たし、相互協力、自己表現を行うなど、他の年代に比べ高い欲求を満たしていた。山あげ祭では、高齢者はより自尊心と協同欲求を満たしており、高齢者の祭への思い入れの深さがうかがえる。

自営業者はより集団における自己実現欲求を充足させていた。この点について考えるにあたって、山あげ祭の歴史をひもといてみたい。渡辺（1999）は、古文書をもとに山あげ祭の形態、担い手の変遷をまとめている。それによると付祭の場は、寛文期（1661～1672年）から元禄期（1688～1703年）にかけては寺内と城内に併存していたが、その後は完全に城下の町人町、つまり今回の調査対象地である旧六町に移行した。祭の世話人は、1660年頃までは町人町の総代として登城する家格を有し、仲町十文字付近に居を構えていた六家の商人であった。その後、他所から移住してきた商人が台頭してきたというが、山あげ祭の主要な担い手は一貫して商人であった。自営業者の集団における自己実現欲求の充足度が特に高かったことは、付祭の場が完全に旧六町に移行されてから三百年以上の年月が経過した今もなお、商人が山あげ祭において主要な役割を果たし続けていることを意味している。

ちなみに豊作を祝い五穀豊穡を祈って行われ、かつては農家の長男だけが舞うことを許されたという高千穂夜神楽においては、農家の人より自己表現、相互協力欲求を満たしていた。山あげ祭と高千穂夜神楽における心理的機能と職業の関連は、2つの伝統的祭の底流に、祭の精神が現代もなお脈々と受け継がれていることを示唆するものといえよう。

以上のように本研究では、当番町、時代、祭への関与に着目して、SD法や因子分析を用いて祭や若衆のイメージ、心理的機能について検討を行った。その結果、従来人々が各当番町の祭や若衆、昔の若衆に対して漠然と抱いてきたイメージが実証的に検証された。各当番町が個性を固持していることは、自町のアイデンティティや誇り、他町へのライバル意識を高めることにつながろう。こうした内集団びいき、外集団との競合は、6年に一度当番町を務めあげるにあたっての原動力となり、ひいては烏山全体として山あげ祭を盛り上げ、継承するモチベーションとなっていると考えられる。一方、祭によって充足できる欲求に関しては、住んでいる町よりも、性別や年代、宮座、職業など、属性や祭への関与によって異なることが確かめられた。祭の担い手においても、季節においても、芸能形態においても好対照をなす高千穂夜神楽と対比させながら検討を行うことで、山あげ祭の

特質が浮き彫りにされると同時に、何百年もの間、変遷を遂げつつ継承されてきた2つの伝統的祭のなかに、今なお固有の祭の精神が受け継がれていることが示唆された。

引用文献

- 福島明子 2000 高千穂神楽伝承者を惹きつける神楽保存会の集团的魅力 民俗芸能研究、30、16-49
- Fukushima, M., 2000 Underlying psychological benefits of the festival, *Takachiho-yokagura, Japanese Health Psychology*, 8, 1-15
- 福島明子 2003 高千穂夜神楽の健康心理学的研究——神と人のヘルスケア・システム 風間書房
- 福島明子 2008 当番町住民の意識にみる山あげ祭の変遷 お茶の水女子大学人間文化創成科学論叢、10、285-296
- 烏山町八雲神社・山あげ祭記録作成委員会編 1964 山あげ祭 烏山町教育委員会
- 烏山町歴史年表編集委員会編 1986 烏山町歴史年表 烏山町
- マッレーH. A. 外林大作訳（編） 1961 パーソナリティⅠ 誠信書房
- マッレーH. A. 外林大作訳（編） 1962 パーソナリティⅡ 誠信書房（Murray, H. A. and collaborators 1983 Explorations in personality. Oxford University Press.）
- 庄司泰久、宮沢鉄蔵、藤本信義ほか 1987 祭の実態と効果（烏山町山あげ祭）——小都市におけるアイデンティティとアメニティとの評価に関する研究その2 日本建築学会大会学術講演梗概集、955
- Tinsley, H. E. A., Barrett, T. C., & Kass, R. A. 1977 Leisure activities and need satisfaction. *Journal of Leisure Research*, 9, 110-120.
- 渡辺康代 1999 近世城下町における祭礼形態の変容——下野国那須郡烏山を事例として 地理学評論、72、7、423-443

謝辞

本研究においては那須烏山市烏山地区（旧那須郡烏山町）の旧六町（泉町、鍛冶町、金井町、仲町、日野町、元田町）、および屋敷町の方々に大変お世話になりました。インタビュー、参与観察、質問紙調査へのご協力に対し、改めて篤く御礼申し上げますとともに、山あげ祭が今後も末永く受け継がれていくことをこころよりお祈りしております。

調査は人間文化学部2004年度「心理学演習」において実施しました。じりじりと夏の太陽が照りつける炎天下、17名の学生とともに合宿を組んで山あげ祭の参与観察を行ったこと（前期）、駅で借りたレンタサイクルに跨り、6名で700軒以上の家々をまわって調査票を配布・回収したことを懐かしく思い出します。ここに調査員の氏名を記し、その働きと熱意に感謝申し上げます。前期：薄井美里さん、大久保裕子さん、片桐剛史さん、加藤敦朗さん、郷間優子さん、齋藤寛泰さん、坂本裕子さん、笹沼正治さん、五月女彩香さん、高瀬正広さん、田代さやかさん、津布久雄介さん、平野博昭さん、松田泰臣さん、武藤利彦さん、森谷昌弘さん。後期：宇賀神愛さん、宇塚沙織さん、小太刀舞さん、佐藤美幸さん、高橋勇吾さん（以上、五十音順。当時人間文化学部3年）。